

過去帳から見た終末期鉄山の山内住民

―播磨天児屋鉄山の場合―

大槻 守

はじめに

宍粟市千種町域には中世の高保木製鉄遺跡、近世の天児屋鉄山遺跡など多くのたたら製鉄遺跡が所在している⁽¹⁾。中でも天児屋鉄山は最大規模でかつ拠点的な製鉄遺跡であり、現在、県指定史跡に指定されている。稼行開始年代は不明だが、宇野正磯氏は西方寺過去帳を調査して、その稼行年代を次の三期に分けている⁽²⁾。

期 宝暦一〇年（一七六〇）

↳ 明和三年（一七六六）

期 享和元年（一八〇一）

↳ 天保三年（一八三二）

期 安政三年（一八五六）

↳ 明治一八年（一八八五）

期では、先に翻刻された「鉄山一件」⁽³⁾によると、湊屋が宝暦九年一二月から明和元年まで五年間、さらに同二年一月まで請け継いで稼行していることが分かる。本稿で扱う過去帳もまた、この宝暦一〇年から始まっている。期については安政六年の「勤方覚書」⁽⁴⁾によると、安政二年から同六年までは泉屋が請負っている。期については現在までのところ請負に関わる文書は発見されていない。明治一八年は同過去帳に記載された最後の年代であり、この年、宍粟郡最後の鉄山であった天児屋鉄山が閉山した年とされている。

天児屋鉄山は「鉄山一件」に「至て山奥へ入り込み候て大雪所ゆえ鉄砂入抄々しくござなく、別して津出場、伊（揖）保川筋とは谷違い二付甚だ

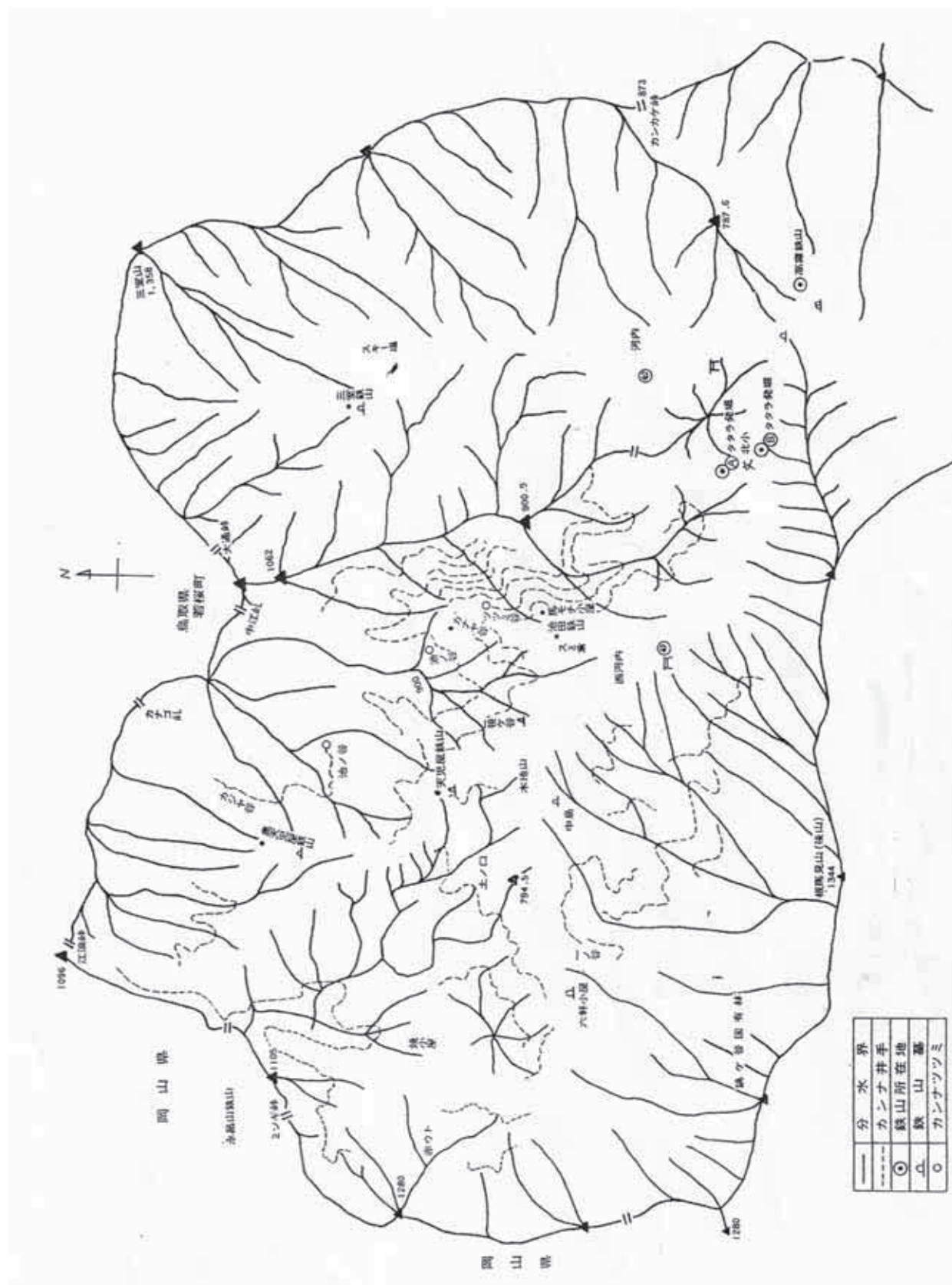


図1 西河内・河内地区鉄山関係地図
 (『千種 西播奥地民俗資料緊急調査報告書』から転載)

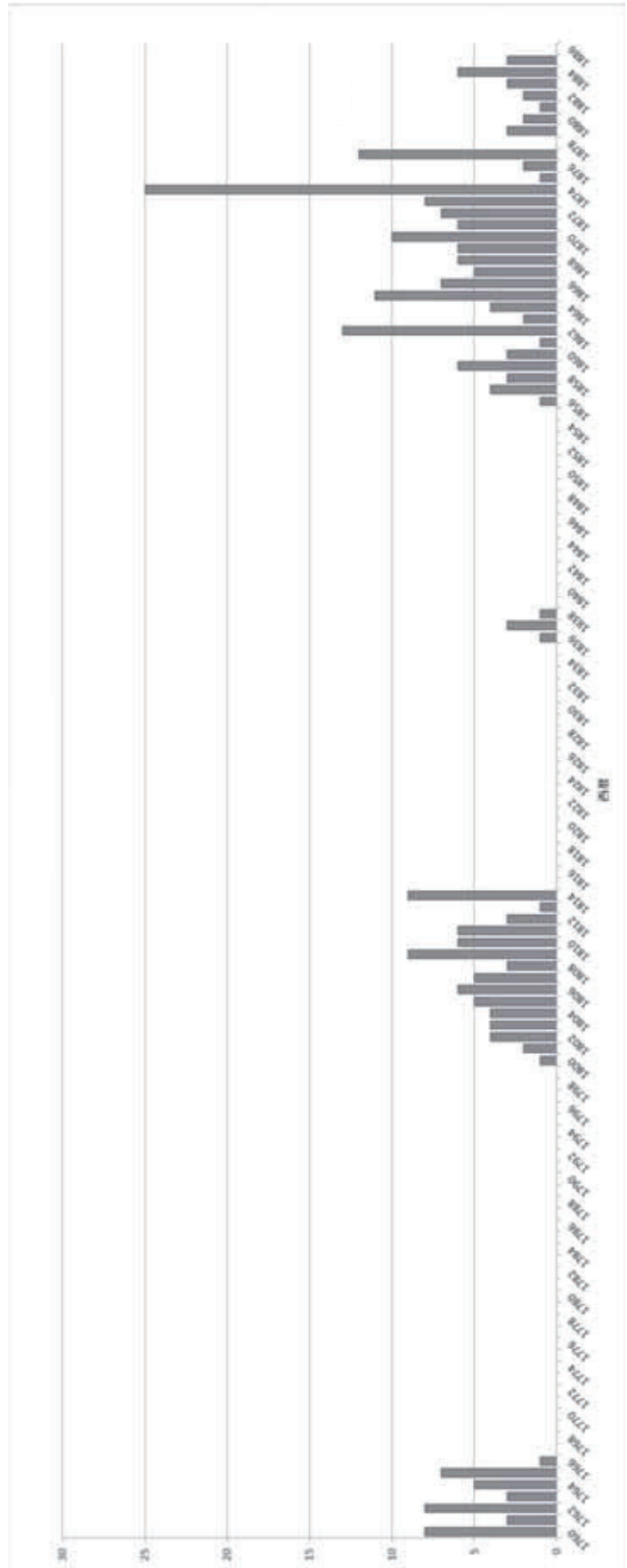


図2 死亡者数の推移

難所道法遠く……」⁽⁵⁾とあるように、出石^{いだし}(津出場)からは僻遠の地、積雪寒冷の宍粟郡北西端、千種町西河内^{にしこうち}に所在する鉄山である(図1)。稼行は長期にわたっており、中世にまで遡りうると見られているが、過去帳から見ると幕末維新期の第⁽⁶⁾期が最も盛んな時期(図2)であったように思われる。

この鉄山遺構については三回にわたって考古学

的発掘調査が行われているが、文献面では大坂泉屋など請負主の史料がまだ知られていないなど史料的な制約もあって研究は遅れている。従って、その経営実態については伺い知ることができないし、ましてやそこで働く山内労働者については聞き書き程度であり、その生活環境の実態についてははまだほとんど知られていない。そこで本稿では、残された過去帳から読み取れる死亡の態様を分析

して、山内の特色と山内労働者の生活の一端を探ってみたい。

一 天兒屋山内⁽⁸⁾

明治初年、わが国の金属生産の筆頭は鉄であり、鉄生産は輸入鉄に圧倒されながらも続いていた。明治七年（一八七四）の宍粟郡の鉄生産高は中国地方の諸郡に次いで第七位⁽⁹⁾であった。当時天兒屋鉄山は、慶応三年（一八六七）から明治四年まで泉屋が名義を確保しながら三日月藩営となっていたが、廃藩置県でこの年完全に撤退したため、明治五年には銀主は高砂の商人に移り、その後は地元で出資を募り経営していた。たたら鉄山の閉山は、そのころ郡内でも相次いでおり、たたら稼ぎ人は困窮して郡外へ移住する者も多かつたが、天兒屋鉄山では逆に、この頃近くの高羅鉄山（東河内）から住民三十数戸が移住してきたため、同一二年には戸籍人口は九年の五三戸から八七戸へと増加している。その頃、東に隣接する引原川流域（波賀町域）では同様に音水鉄山にたたら労働者

が集住していた。この両鉄山が宍粟郡では最後まで経営されていた鉄山である。

ところが、上昇していた鉄価が、その後、一五年ごろから下落に転じたこともあって、一八年、ついに天兒屋鉄山も閉山するにいたった。この年の西河内村文書によると貧民中極貧の者二七戸一二人とあり、その人たちは苗字から判断して鉄山で働いていた人々と推定され、当時の窮状がうかがわれる。残った村下たちが二四年ころまで経営を続けていたが、国有林への立ち入りを禁止されていたこともあり、しだいに分散移住に追い込まれていった。天兒屋鉄山では旧住人が「明治二〇年から二二年頃に大茅野（西隣の岡山県西粟倉村）や同県英田郡布袋山鉄山へ移った」と伝えるし、県内では生野や明延、神子畑の鉱山へ移る者があつたなど県内外へ移住している。中には近在に定着して、野鍛冶や農林業に従事したり炭焼きをしたりして生計を立てる人たちもあつた。戦後⁽¹⁰⁾の昭和二八年（一九五三）頃にも四戸残っていたとあり、最後の一軒は勘定場跡の住人で、昭和四四年には夏場だけ住んでいた。墓地へは昭和三三

年ころまで埋葬が続いている（図4参照）。

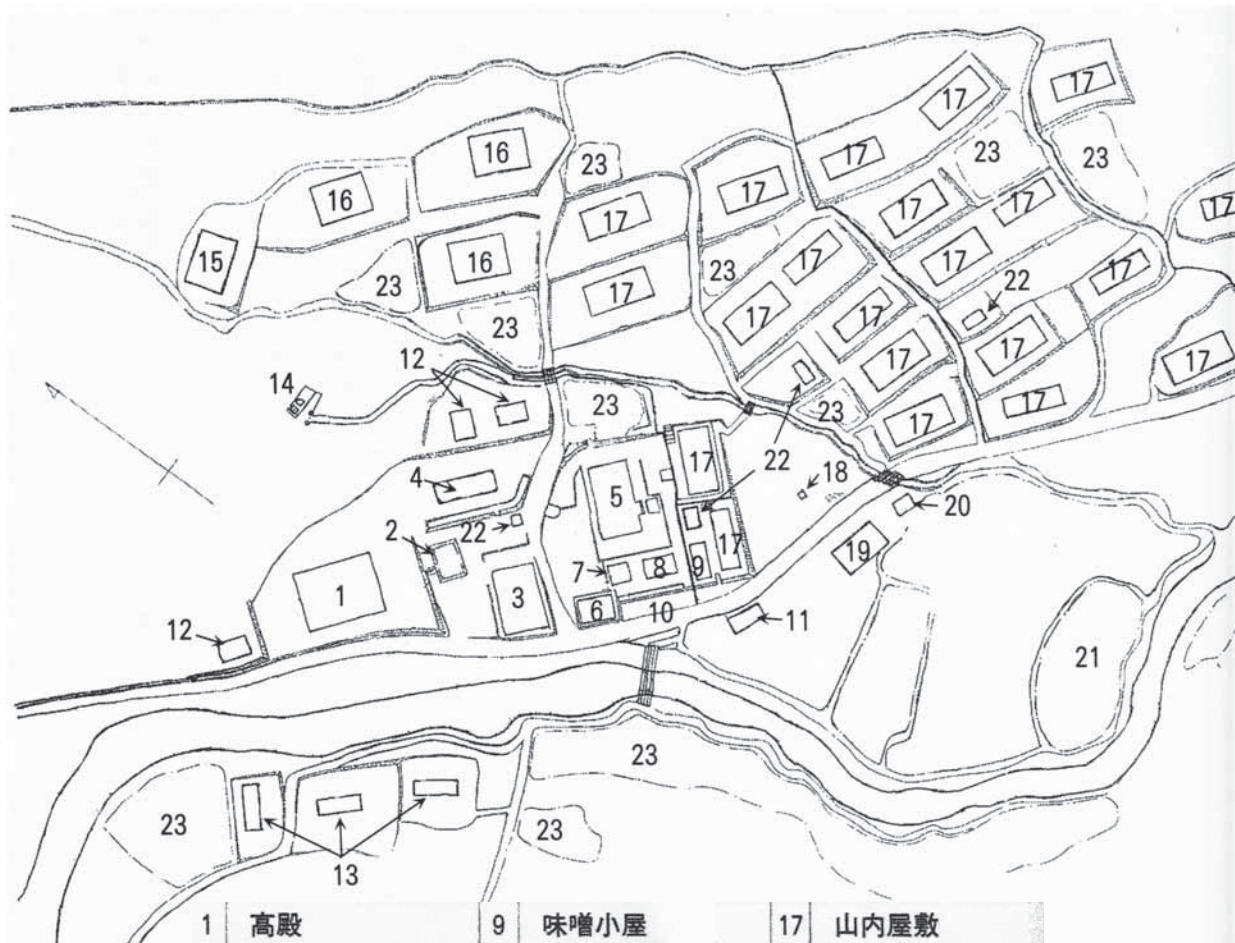
天兒屋鉄山には宗門改帳などの史料が残されていないので、山内の成立や人口の推移は明らかでないが、山方役人の申し伝えによると、近世では一般に「一山に相拘候下財二百五、六十人より三百人に余候人数⁽¹¹⁾」とあって、当時の経営規模がうかがえる。また、「千種村是⁽¹²⁾」では山内稼人が荒尾山には三〇戸、高羅山は同じ、天兒屋は七〇戸とある。天兒屋鉄山は、小規模が多いとされる鉄山にあっては全国的にみても大規模であった。

明治九年の戸籍では、住民はすべて姓を名乗っており、釜本・加治姓が多く、他に村下・手槌・炭本・日下姓などがある。山内では姓を名乗るようになった時、世襲してきたたたら職分によつたと伝えている⁽¹³⁾。村下は鈔場の責任者であり、鍛冶大工が加治と名乗り、その下の向こう槌打ちが手槌となり、精錬用の大炭製造人が釜本・炭本を名乗ったという。山内にはたたら製鉄で働く専門的労働者である鈔方と鍛冶方の人たちが居住していた。鉄穴流しや砂鉄・製品の輸送は鉄山付村民の農間稼ぎであった。

たたら製鉄の生産工程についてはよく知られているが、当地ではそこで働く山内労働者の労働環境や生活実態については断片的にしかわからない。

一般に鉱山社会には生産や生活を支配する山法⁽¹⁴⁾のあったことが知られているが、当地の鉄山では山内を規制する掟類は確認されていない。ただ、鉄山師が請負証文で宗門改めの実施を誓約していたり、「勤方覚書」で、山内の秩序維持のため手鎖などの処分が認められたりしていることなどからみて、山内に一定程度の自治が認められていたことがうかがわれる。

天兒屋鉄山は五〇〇メートル四方の大規模な遺構である。この山内に配置されていた諸設備を、山内旧住民が記憶によつて描いた地図⁽¹⁵⁾（図3）がある。高殿を中心に大胴場や金池・鍛冶場などたたら生産の諸設備のほか、住民の生活にかかわる山内小屋や風呂場、生活用品を受け取った勘定場（元小屋）などがあり、仕事着を自給するための麻畑や紺屋も見える。山内が生産から生活までのすべてが完結する閉ざされた空間であったことを示している。これらの配置はその後の発掘調査報



1	高殿	9	味噌小屋	17	山内屋敷
2	金池	10	牛つなぎ場	18	山ノ神祠
3	大鋸場	11	牛小屋	19	紺屋
4	砂鉄炭小屋	12	道具小屋	20	麻蒸場
5	勘定場	13	鍛冶小屋	21	カナクソ捨場
6	米蔵	14	金屋子神祠・妙見神祠	22	風呂
7	小鋸場	15	山配屋敷	23	麻畑
8	鉄倉庫	16	村下屋敷		

図3 天見山鉄山諸設備配置図

告によって、ほぼ正確であったことが証されている。¹⁶⁾

山内小屋は、昭和四七年（一九七二）報告の民俗調査報告『千種』¹⁷⁾によると、棟割長屋で壁が境、一棟は二軒から八軒続いていて、間口は一間である。屋根はスギ皮葺か力葺であり、炊事場は小川のそばにあったとある。また別に、山配屋敷、村下屋敷があり、山元支配人や村下大工級には一戸建てが与えられていたことが分かる。「鉄山一件」で見ると、新しく鉄山経営を請負うと先ず鉄山への道を造り、鋤場など作業場を建設してから「山

内下財居小屋」を普請するとある。屋根葺き材料は雪に強い茅であった。当時の鉄山請負年数は平均六年強であり、ほぼ一〇年以下で場所替えしていたことが分かる。最も念入りに築くのは高殿であり、住居はごく簡素な造作であったと思われる。事実、昭和五八年の天兒屋遺跡発掘調査⁽¹⁸⁾で確認された山内小屋群の長屋には、掘立柱跡も基礎石も認められなかった。屋内は壁さえ塗られず、ムシ口を壁代わりにぶら下げていたのではと推測している。冬季には数十センチは積もるといふ寒冷積雪地帯にあつて、住むには厳しい構造であつたといえる。

二 天兒屋鉄山墓地

千種町域内には図1に見られるように、鉄山墓があちこちに所在する。墓地は鉄山の移動と共に労働者も移動するので新しく造られる。天兒屋には鉄山が二カ所あり、山内住民の墓地も二カ所にある。一つは山内の木戸番小屋があつた入り口近くにあり、もう一つは天兒屋遺跡からさらに二キ

ロメートルほど入った奥にある。いずれも現在は無縁墓⁽¹⁹⁾であるが、これらの墓地については宇野正磯、鳥羽弘毅両氏⁽²⁰⁾がそれぞれ調査し記録を残している。

昭和六一年（一九八六）の鳥羽氏の調査によると、奥の墓地は四二基で無名墓が二五基と多い。畿内の近世農村でも、戒名を記した個人墓を建立するのは一八世紀前後からと見られており、それまでは川原石（自然石）だけの粗末な墓標が多かつた⁽²¹⁾。奥の墓地の年代は宝暦一〇年（一七六〇）から文化八年（一八一）にわたつていて口の墓地より古く、この奥天兒屋鉄山は、先の稼行年代からいうと 期から 期にかけての時期に当たっている。

口の墓地には没年の分かる墓碑が一〇九基ある。期間は寛政五年（一七九三）から昭和三三年にかけての一六五年にわたつている。第 期の時代である。

墓碑銘を見ると戒名は居士・大姉が各一基で他はすべて信士・信女、童子・童女である。記入してある職種には鍛冶三、鍛冶大工二、石切一があ

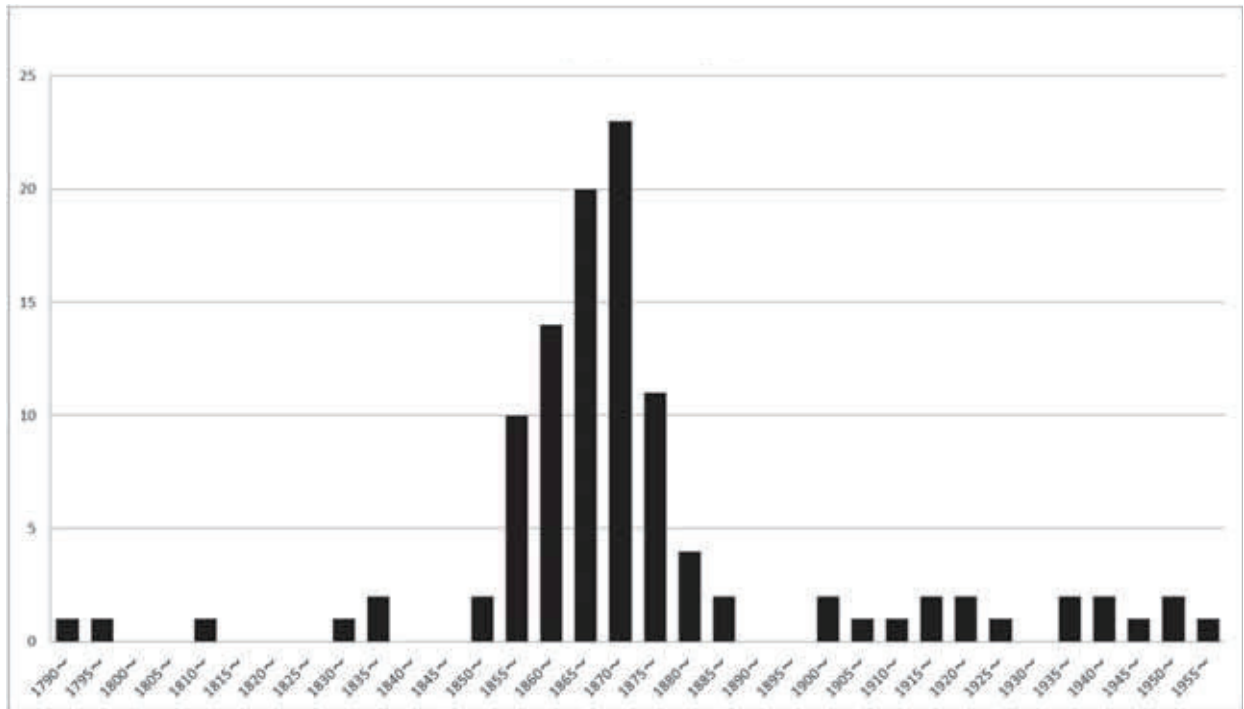


図4 死亡者総計の推移（5年単位）

る。また、俗名が刻されているのは差配人中井恒助倅と山配丹蔵だけである。中井恒助は鉄山請負人泉屋の差配人で東河内村に恒助屋敷があったと伝えている。苗字の分かるのは加治三、村下一、釜本六で、戸籍の記述と同様の傾向である。

墓碑からみた死亡者数の推移は図4の通りである。ただし、このグラフは図2と違って五年毎の合計数の推移であって、年毎の変動を示しているものではない。期間は寛政五年から昭和三年まで一〇三年間であるが、集中しているのは安政二年（一八五五）から明治一二年（一八七九）までの二四年間で墓碑の七二パーセントを占める。このことから、この墓地は第一期の天児屋鉄山の盛衰を反映していると思われる、墓碑から見ても幕末から明治初年にかけてが最盛期ではなかったかと想定される。なお、閉山後の明治一二年からは幼児の埋葬がなくなっている。

三 過去帳からみた天児屋鉄山

近世では明治以後の戸籍にあたるのが宗門改帳

である。山内労働者の人口情報を得るにはこの宗門改帳があれば重要な情報源となる。鉄山請負証文には「抱の下財宗門改め」の一項が必ず挿入されており、山内の宗門改めをするのは鉄山付村の役人ではなく、請負主である鉄山師である。従って宗門改帳は鉄山師のもとに保管されていたはずであるが、現在までのところまだ発見されていない。そこで今回はこれに代わる資料として取り上げるのが寺院過去帳である。宗門改帳と並んで過去帳が重要な史料となることはすでに歴史人口学が明らかにしているところである。⁽²²⁾ 過去帳は、寺院にとつては死者を供養するために必要な基本的な台帳であり、檀家制度が確立していた近世にあつては、住民にとつて檀家であることを証明する重要な台帳となるものであつた。

天兒屋山内住人の過去帳は、現在千種町室の真言宗西方寺にある。かつては西河内に西方寺の末寺雲林寺があつたと伝えており、⁽²³⁾ 廃絶した後、檀家は西方寺に移つたといわれている。

(1) 死亡者数の推移

西方寺の過去帳は死亡順に記した逐年式（暦年過去帳）の形であり、断続しながら宝暦一〇年（一七六〇）から明治一八年（一八八五）まで一二五年間にわたっている。

過去帳も墓碑と同様、宇野・鳥羽両氏⁽²⁴⁾がともに調査しており、それぞれに調査記録が残されている。また、成果の一部は『近世千草鉄山史料 中』に収録されている。本稿で使用した過去帳は宇野文庫（注20参照）に納められている「鉄山関係戒名調べ」の内の「西方寺過去帳」によつていふ。なお、先に述べた墓碑は昭和年代まで続いているが資料数が少ないし、この過去帳とは一致していないものもあるので、ここでは参考にはするが分析には直接参照しないこととする。

過去帳の記載内容は、死者の戒名、当主の名前と死者との続柄、死亡年月日であり、その他は僅かな注記だけ、当主の名前に姓が記されるのは明治一二年からである。明治政府は明治八年から平民も必ず姓を称するように布告しており、明治九年の戸籍では既に姓が記されているのだが、この過去帳ではなぜか記されるのが遅れているようである。

ある。また、冒頭の宝暦一〇年から明和二年までの数年間だけ当主の職種を示す次のような肩書き―山子（五）、カジ（三）、カジヤ（一）、バンコ（一）、テゴ（一）の五種が記入されている。これら山内の職種は世襲であり、明治以後の苗字に受け継がれていることは墓碑の項で述べたところである。

戒名で注目されるのが院号である。農村ではまず見ることはないし、ここでも江戸期には全く見られなかったのが、明治六年以降、特に一〇年から一四年の間にだけ集中して現れる。この五年間の死亡者一八人中七人である。父（一）・当主（二）だけでなく、妻（二）・子（一）、妹（一）にまで及んでいる。葬儀は院号にふさわしく執り行われたと思われる。なぜこの時期にだけ戒名に、ひいては葬儀にお金をかけていたのか。この時期鉄価の上昇に伴い、たたら関係者も一時期潤ったのではないだろうか。宵越しの銭は持たないといった鉄山者気質⁽²⁵⁾を見る思いがする。

享年の記載はないので、世代区分は父・母・祖父・祖母は老齡、当主・妻・子・娘は成人、童子・

童女は幼童とした。童子・童女は一三歳までと過去帳から分かるので、これら以外は成人とみなしている。また、戒名によって男女は区別した。すなわち居士・信士・禅定門・童子は男、大姉・信女・禅定尼・童女は女とした。なお、死亡原因については一切記載がないので、高死亡年であってもその原因は特定できなかった。

過去帳の記載内容から指摘できる第一は、家族形態が当主を中心とする直系単婚家族であるということである。祖父母から孫にいたる五世代にまたがっており、直系家族以外は僅かに妻の父（一）、妻の母（一）、妹（二）の四人だけである。こうした直系単婚家族化が近世を通じて山内で進んでいたことを武井博明氏⁽²⁶⁾は明らかにしている。安芸国の一山内の事例だが、文政五年（一八二二）では直系単婚家族がほぼ半数にとどまるのが、明治五年には八割以上となっている。それに伴って家族規模も四・二人から明治五年には五・七人と増加している。これが天児屋では明治九年で四・一人であるのは、家族規模が既に増加から減少へと転じていた結果ではないかと推測するが、今のと

ころ判然とはしない⁽²⁷⁾。

金属鉱山の金掘り（鉱夫）の場合は妻子を持たない傾向が強く、擬制的な親子関係を形成し、幕末には「友子⁽²⁸⁾」という社会集団として発展していったというが、たたら山の山内労働者は世襲的な技術労働者であり、比較的早くから家族集団を形成していたと思われる。先に述べた墓碑は「家」の継承者が建立したものであり、近隣の村々と変わらない墓碑建立の一般化から見ても、「家」意識の表れが一八世紀の中ごろには既にあつたことが読み取れる。

鉄山師はこうした家族集団を抱え込んで、隔離された山内集落を形成していたのである。それは、天明飢饉の時、鉄山師鳩屋が鉄山稼ぎを休みたいが、そうすると「年来召抱候下財共妻子二至迄、当日より及飢候儀嘆敷⁽²⁹⁾」と内情を訴えているのを見て、そこに単なる雇用をこえた関係があつたことが分かる。後世、山内住人はその暮らしを振り返って、「山内では米を初め食料も日用品もすべて親方が取り寄せ分配されていた」と話している。このように山内住人は家族ぐるみ鉄山師に依

存した生活をせざるを得ず、さまざまな債務に拘束された雇用関係に支配されていたことであろう⁽³⁰⁾。また、「男の子は生まれると米三合、女の子は一八になるまで支給されなかつた⁽³¹⁾」と、元住民が回想しているところからは、男の子は生まれた時から山内の労働力となるものと予定されていたことが分かる。一方、高殿へは女を立ち入らせなかつたというが、女もまた「鉄山の手伝い」として山内で様々な働きをしていたことも事実である。

これらとは別にまた、「客」と記入する二例があり、他国から来て同居し働いていたと思われる。逆に作州（鉄山）での死亡が三例など他国での死亡例が六人ある。当地では山内労働者の移動は検証しがたいが、ここに僅かながらその痕跡がうかがわれるようである。「鉄山一件」にも、やむなく暇を遣わしても「用立候ものは早速何国えも罷越、存附可申候⁽³²⁾」とあり、技術のあるものはどこでも生きていけると言うのである。それだけにまた鉄山師にとっては様々な拘束が必要だったということであろう。

次に過去帳から読み取れた死亡者数の推移（文

末の「資料 死亡者数の推移」(参照)を示すと、図2のようになる。先に記した天児屋鉄山の三期にわたる稼行期間に対応して、三つのかたまりをつくっている。ただ、期を天保三年までだとすると、その後半に当たる年代分が欠けていることになり、⁽³³⁾そうするとこの図が全貌を示すものではなくなることをお断りしたい。

このグラフを一目して明らかなのは、年毎に急激に変化する増減があり、何年かおきに高い山が突き出ていることである。このような死亡者数の激しい増減が繰り返されるのは前工業化社会の特徴であるという。⁽³⁴⁾繰り返して発生する飢饉や伝染病の流行のためである。ことにこの傾向がこのグラフでは第一期に顕著に表れている。ここでは飢饉よりは伝染病のためであろう。

(2) 死亡者指数

先に述べたように天児屋鉄山には山内労働者の宗門改帳が伝存しないので、正確な人口動態を把握することができない。そのため死亡率を算出することができないのだが、それに代わるものとし

て死亡者指数を用いることができる。死亡者指数とは分析期間の一カ年当たりの平均死亡者数を算出し、各年次の死亡者数をこれで割って算出したものである。本稿の場合、一カ年当たりの平均死亡者数が五・〇人であるので各年次の死亡者数をこの五・〇人で割ったものが死亡者指数となる。この指数が平均を五〇パーセント以上上回る年次、すなわち死亡者指数一・五以上を高死亡年とし、一・二以上、一・五未満を中死亡年、一・二未満を平常年と区分した。この死亡者指数一・五以上という極めて死亡者数が多い年(八人以上)は人口学でいう異常年、死亡クライシスの年とみていいであろう。

参考のために人口が分かる年の死亡率を算出してみた。明治九年は戸籍人口が五三戸、二一六人とあるので死亡率は九・三パーミル、明治一二年は八七戸で八・六パーミルとなる。これは幕末の死亡率が一般に二五パーミルを下回らなかったと推測されているの⁽³⁵⁾に比べると極めて低い数字となる。ただ、これは図2から読み取れるように明治一〇年という異常年を挟む前後という事情を考慮

せねばならないだろう。だが、それにしても生活環境が劣悪であったと推定されるのに、この予想を超えるような低い死亡率であることには注目される。

(3) 過去帳から見た死亡構造

次に死者数の世代別・男女別・月別分布を考察してその特徴から死亡構造を考えてみたい。

近世農村の年齢別人口構成は一般に一五歳以下が三〇パーセント以上、一五〜六五歳の青壮年が六〇パーセント以上、六六歳以上の老年人口は数パーセント迄という典型的なピラミッドを示している。ところが本過去帳から見た死者の世代別割合(図5)を幼童・成人・老齢の三区分で見てみると、幼童一六パーセントに対して、成人六八パーセント、老齢一六パーセントと成人・老齢が多いつぼ型となる。一八世紀の中播磨の農村の事例³⁶⁾、幼童四四パーセント・成人三九パーセント・老齢一七パーセントという構成と比較してみると、幼童の割合が極めて小さく、逆に成人が七割を占めている。これは農村の家族集団とは異なり、山

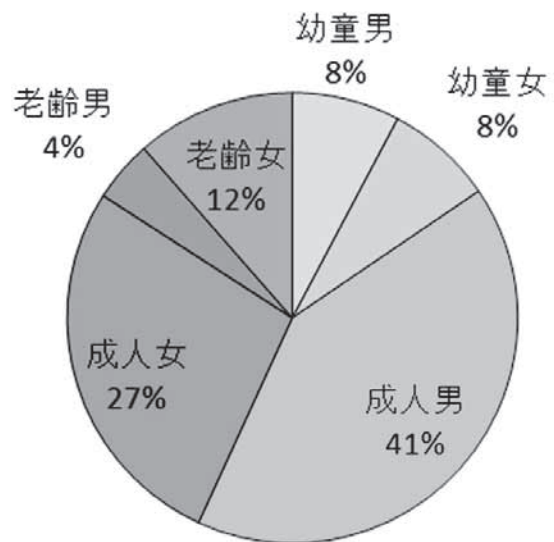


図5 世代別死亡者の割合

に係わっているのではないかと考える。

これを時代区分で見ると(表1)、期は老齢が五一パーセントと半分を占め、幼童が数パーセントと極めて少ない。期は成人が八割を占め、老齢は一六パーセントに減少している。期になると老齢はさらに半減し、幼童が二三パーセントと大きく増加している。時代を下るにつれて山内労働の担い手が若返っているように見え、幼児の増加を伴うなど家族構成も大きく変化しているのが読み取れる。これはまた先に述べように単婚家族化への表れではないかと考える。

内は壮年労働者を中心とした家族で構成された特異な労働集団であったことを反映しているようである。また、これが先に述べた低死亡率

表 1 世代別死亡者の割合の推移

区分		老齡	成人	幼童	計
Ⅰ期	人数(人)	18	15	2	35
	割合(%)	51.4	42.9	5.7	100
Ⅱ期	人数(人)	11	54	3	68
	割合(%)	16.2	79.4	4.4	100
Ⅲ期	人数(人)	14	112	37	163
	割合(%)	8.6	68.7	22.7	100

表 2 月別死亡者数

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	計
幼童(男)			3	4		1	3	4	3	3			21
成人(男)	8	3	6	11	11	11	13	16	8	14	7	4	112
老齡(男)	2	1	1			3		1		2			10
幼童(女)		3	4	3	2		1	2	1	1	3	1	21
成人(女)	7	8	5	8	5	5	6	7	10	5	2	6	74
老齡(女)	4	3	1	3	6	2		1	6	4	1	2	33
男	10	4	10	15	11	15	16	21	11	19	7	4	143
女	11	14	10	14	13	7	7	10	17	10	6	9	128
全体	21	18	20	29	24	22	23	31	28	29	13	13	271

次に男女別の割合は男五三パーセント、女四七パーセントとほぼ同じであるが、働き世代では男が多く六〇パーセント、老齡では一転して女が多くなる（七七パーセント）。これは先の農村の事例と同じ傾向である。一般に坑内労働に従事する鉱山労働者（金掘り）の寿命が極めて短命であることはよく知られているが、高殿と鍛冶場で働く山内労働者の場合は農民と比べて基本的に違くないと言える。また、総じて女の方が長命であった。

さらに月別分布を考察する。月別分布は命日の記載がある過去帳の利点が最も活かせる分野である。本稿では旧暦はそのまま、閏月はその月に入れている。月別死亡者数を示す図6と表2を見ると、八月を頂点とし八〜一〇月の死亡が多く、七月を加えると四割強を占めている。また、男（成人・幼童共に）の割合が大きいことが特色である。逆に最も少ないのは一・一二両月で、続いて二月である。

鬼頭宏氏⁽³⁸⁾は江戸時代後期の季節性に関する一般的傾向として、総死亡者数の分布は夏に集中する

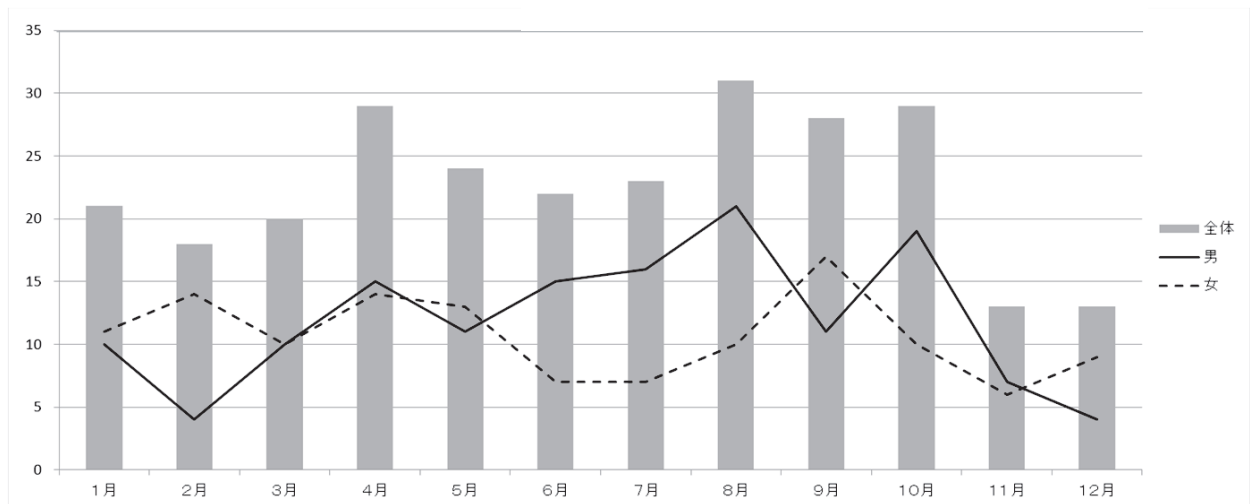


図6 月別死亡者数

という点を強調している。夏には幼童への影響が大きい下痢・腸チフス・赤痢といった消化器疾患の流行が多く、心臓病・脳卒中・老衰など成人病は夏と冬に二つの山を持つからだという。しかし、当山内の場合はこの夏集中型とは違い、夏から秋にかけて増加しており、夏・秋集中型と言えそうである。先の中播磨の農村がすでに秋・

冬集中型へ移行しているのとはまた違っている。成人男の死亡数が四月から一二月にかけて多いためであろう。たたらでは高温な労働環境⁽³⁹⁾のため、夏に山内労働者の死亡が多くなるという傾向が出てくるのではないだろうか。また、当地が単作地域であり、端境期の飯米確保⁽⁴⁰⁾に問題があったのではないかと考えられる。

(4) 高死亡年の特徴

山内の死亡の季節性は夏・秋集中型と述べたが、高死亡年にはまたそれぞれに特徴がある。先ず高死亡年は図2から読み取れるように第一期には七一年間に二回、期は一五年間に二回、期は三〇年間に五回とそれぞれ数年間に一回の割合で出現している。これらは一般に十数年に一回は高死亡年が現れると言われているよりも頻度が高いように思われるが、これは山内という環境によるものか、幕末維新という時代の反映なのかは判らない。さらに高死亡年の時代別変化の現れ方を表3でみると、期では高齢者の死亡が多く、期では幼童の死亡が多くなる。その上死亡者指数が

表3 高死亡年の時代別死亡者割合

	西暦	和歴	成人男	成人女	幼童	老齡	計	指数
I 期	1760	宝暦10	4	0	1	3	8	1.6
	1762	宝暦12	2	4	0	2	8	1.6
II 期	1809	文化6	2	7	0	0	9	1.8
	1814	文化11	5	0	3	1	9	1.8
III 期	1862	文久2	5	3	4	1	13	2.6
	1865	慶応元	0	7	3	1	11	2.2
	1870	明治3	4	3	1	2	10	2.0
	1874	明治7	5	6	14	0	25	5.0
	1877	明治10	2	5	3	2	12	2.4

・ の両期と比べて
 期は二・〇から五・
 〇と極めて高くなつて
 いる。これから見ると
 幼童への影響の大きい
 伝染性疾患の流行が考
 えられる。出現頻度と
 共に気になるところで
 ある。

次に高死亡年の特徴
 を表4で考察してみる。
 当地の死亡の季節性は
 夏・秋集中型といった
 が、明治七年（一八七
 四）は三・四月（春）
 に、文化一一年（一八
 一四）と文久二年（一
 八六二）は八月（夏）
 に集中しており、明治
 一〇年は七月から一〇
 月（夏から秋）にかけ

て多くなっている。他は特に季節性は見られない。
 また、死亡者を世代別にみると全世代にわたって
 いる明治一〇年に対し、文化六年は成人女が、文
 化一一年は成人男が多く、明治七年は幼童と成人
 のみといった偏りがある。このように高死亡年に
 はそれぞれに特有の要因があると思われる。その
 背景には毎年のように襲来する各種伝染病（コレ

表4 高死亡年の死亡者発生状況

月 \ 年	文久2	慶応元	明治7	明治10
1		2	1	2
2			2	1
3		1	9	
4	1	1	5	
5	2	2	1	
6	1		2	
7	1	1		2
8	6	2	1	2
9	1	1	2	4
10	1		1	1
11			1	
12		1		
計	13	11	25	12

ラ・腸チフス・発疹チフス・ジフテリア・天然痘・赤痢⁽⁴¹⁾の流行があったからであろう。中でも明治一〇年の場合はコレラの流行⁽⁴²⁾が気になるのだが、この年は九月下旬に神戸で発生し、一〇月に入つて各地へ広がつたとあり、当地の流行期間とは時期がずれているように思われる。

さらに、死亡者の発生状況を立ち入つて検討してみよう。もっとも死亡者数の多かつた明治七年の事例を整理してみると表5の通りである。

前年の六年には特に異状は認められなかつたが、この年の二月に入つて死亡者が発生し、三月にわかには激増し四月へと続くが、五月以降は急速に鎮静化している。またこの三・四両月での死亡者一四人の内訳では幼童が一人と八割弱を占めている。茂左衛門と佐蔵の家では子ども二人が相次いで亡くなつてゐるし、徳兵衛は妻と子供一人を亡くしている。五月以降も成人男女の死亡が例年より多くなつており、この年の総数で二五人となる死亡者数は過去最多で、住人の一割を超えていたであろう。罹患者数はさらにこの何倍もあつたと思われ、二三百余年の間で最も痛ましい年であつ

表5 明治7年の死亡者発生状況

月	老齡		成人		幼童		總計		
	男	女	男	女	男	女	男	女	計
1	0	0	1	0	0	0	1	0	1
2	0	0	0	0	0	2	0	2	2
3	0	0	1	1	3	4	4	5	9
4	0	0	0	1	2	2	2	3	5
5	0	0	0	1	0	0	0	1	1
6	0	0	1	1	0	0	1	1	2
7	0	0	0	0	0	0	0	0	0
8	0	0	0	1	0	0	0	1	1
9	0	0	1	1	0	0	1	1	2
10	0	0	1	0	0	0	1	0	1
11	0	0	0	0	0	1	0	1	1
12	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	5	6	5	9	10	15	25

た。こうした推移は明らかに疫病の流行を示しており、山内集落が閉鎖された空間だけに一旦感染すると大きな打撃を受けることになつたのである。

おわりに

以上の過去帳の分析から明らかになったことは、以下の通りである。

墓碑と過去帳から見て、慶応元年（一八六五）から明治七年（一八七四）頃にかけてが終末期鉄山の最盛期であったと思われることさらに戒名（院号）の現われから見ると、明治一〇年から一四年にかけて、鉄価の上昇を背景に鉄山が最後の活気を呈していたと思われること。

山内の家族は直系単婚家族を形成しており、単婚家族化へと変化していること。

一般に短命といわれる鉾山の鉾夫と違い、一般農村並の寿命であったこと。

死亡の季節性は夏・秋型であること、また夏に成人男子の死亡が多いこと。

数年ごとに起きる死者の激増には各種伝染病の流行が想定され、山内の閉鎖性がその被害を一層拡大させていること。

たたら集落（山内）は非鉄金属鉾山の盛衰以上に短期間で移動を繰り返しており、住民相互の結びつきはより強固になったと思われる。鉾山の金掘りは短命でかつ妻子を持たなかったため、相互扶助のため擬制的親子関係が生まれたというが、たたら山内は鉾方と鍛冶方という専門技術者の集りであり、世襲で技術を伝えるため比較的早くから家族を形成することになったと考える。ただ、当然ながら形成時期には地域差があるのではないかと推測する。その過程で人口構成上成人が多くなり、ついで、幼童の割合が大きくなる時期があるのではないだろうか。

また、死亡の季節性が夏・秋型であり、成人男子の死亡が夏に多いことは、たたら製鉄の労働環境からくるのではないかと想定される。

本稿は天兒屋鉄山という限られた一事例であり、今後、他の山内や周辺農村との比較検討が必要であろう。当地の限られた史料を新しい視点から見直す一つの試みとして提示したところであるが、関連する史料がなく多くが推測の域を出ることができなかつた。

なお、過去帳の取り扱いには人権的な配慮が求められている。ただ、今回の過去帳には差別戒名はみられないし、現存する人たちに直接つながるものではないことに加えて、内容は既に公開されていることを勘案して分析の対象とすることとした。

「付記」本稿作成に当たってデータ処理では青田義一氏に、図表の整理では福永明子さんに協力いただきました。記して感謝の意を表します。

- (1) 『兵庫県遺跡地図』には二七カ所の遺跡名が記載されている。なお、「天児屋」という表記は注(3)の近世史料「鉄山一件」ではすべて「天小屋」と記している。
- (2) 宇野正磯「宍粟郡における近世鉄山業について」(『研究紀要』一、たたら研究会、一九五八年)。
- (3) 『近世播磨のたたら製鉄史料集』所収(兵庫県歴史博物館ひょうご歴史研究室、二〇二〇年)。
- (4) 『播州宍粟郡須賀村山方役所附前々より勤方覚書』(宇野正磯編『近世千草鉄山史料』下、一九七〇年、私家版)。
- (5) 前掲注(3)一〇四頁。

- (6) 発掘調査した村上紘揚氏は天児屋鉄山の稼行開始は近世以前にさかのぼると見ており、江戸時代初期(慶安)から中期(宝暦)にかけてが最も繁栄を極めた時期ではないかという(『播磨における製鉄遺跡の調査』『歴史手帖』九四、名著出版、一九八一年)。
- (7) 第一次(昭和五五年度)、第二次(昭和五八年度)、第三次(昭和五九年度)の三回にわたって実施された。
- (8) この項は鳥羽弘毅『たたらと村 千草鉄とその周辺』(千種町教育員会、一九九七年)によるところが多い。
- (9) 『明治七年府県物産表』(『明治前期産業発達史資料』第一集)。
- (10) 小原義男「千種鉄(二)」(『兵庫史学』一、一九五六年)。四戸はすべて「村下」姓であった。
- (11) 前掲注(3)一六三頁。
- (12) 千種村発行、一九二〇年。
- (13) 錦耕三・平山敏治郎編『奥播磨民俗探訪録』(近畿民俗学会、一九五三年)一八五頁。
- (14) 荻慎一郎『近世鉾山社会史の研究』(思文閣出版、一九九六年)、四九七、五一四頁。
- (15) 本図は村下松敏氏の記憶をもとにした配置図である(鳥羽弘毅『たたらと村 千草鉄とその周辺』一四五頁)。また、別に井口二四雄氏は村下市次郎氏が描いたという想定図を残している(『ちぐさ鋼につい

- て、私家版、一九七五年)。千種町教育委員会でも古老の話をもとに想定図を作っていたというが、前記二例と異なるかどうかは確認していない。
- (16) 『昭和五八年度千種町天児屋タタラ遺跡発掘調査報告書』(千種町教育委員会、一九八四年)。
- (17) 『千種 西播奥地民俗資料緊急調査報告』(兵庫県教育委員会、一九七二年) 九〇頁。
- (18) 前掲注(16)。
- (19) 春名七郎兵衛が昭和五十一年に鉄山無縁の諸仏のため西方寺境内に供養塔を建立している(『千種町史』三九六頁)。
- (20) 宇野正磯作成ファイル「鉄山戒名調べ」。
鳥羽弘毅作成ファイル「天児屋鉄山墓調査写真集」
「鉄山墓・長永寺過去帳ほか」。
宇野・鳥羽両氏の旧蔵史料はともに遺族から宍粟市歴史資料館に寄贈され、宇野文庫などとして整理保存されている。
- (21) 荻慎一郎『近世鉾山をささえた人びと』(山川出版社、二〇一二年) 一五六～一五八頁。
- (22) 鬼頭宏『人口から読む日本の歴史』(講談社、二〇〇〇年) 一六一～一六二頁。
速水融『歴史人口学の世界』(岩波書店、二〇一二年、初出は一九九七年、七五頁)。
- (23) 『千種町史』(千種町、一九八三年) 六六頁。
- (24) 宇野正磯、前掲注(20)。鳥羽弘毅、前掲注(20)の「秋福山西方寺過去帳」。
- (25) 荒尾鉄山の古老の語りとして「鉄山所帯というて、もろうた銭は全部使ってしまう」といい、「贅沢なものじゃ」ともいった、と記している(『千種町史』三四五～三四六頁)。「たたらと村」でも「金山世帯いうてそら豪気なもんじゃった」と語らせている(一四二頁)。
- (26) 武井博明『近世製鉄史論』(三一書房、一九七二年) 一八六～一九三頁。
- (27) 速水融氏は諏訪地方の平均世帯規模は幕末には四・五人に落ち着いているといい、明治後期以降の農村の平均世帯規模は五・五人のままだともいう(速水融『歴史人口学の世界』)。
- (28) 村串仁郎『日本の鉾夫 友子制度の歴史』(世界書院、一九九八年)。
- (29) 前掲注(3) 一七二頁。
- (30) 前掲注(14) 二九四頁。
- (31) 前掲注(8) 一四二頁。
- (32) 前掲注(3) 一六三頁。
- (33) 宇野氏は文化一一年の戒名の後に「断絶あり」と注記している。
- (34) 前掲注(22) 一五八頁。
- (35) 前掲注(22) 一五六頁。
- (36) 拙稿「過去帳から見た一八世紀農村の死亡構造 播磨国神西郡犬飼組の場合」(『兵庫地理』六四、二〇一九年) 四一頁。
- (37) 前掲注(21) 四六～四八頁。

(38) 前掲注(22) 一六二丁一六六頁。

(39) 井口二四雄氏は聞き伝えとして「高温の炎を絶えず見ているため若くして視力を失う村下・炭坂が多かった」とか、「服装は黒のアツシに黒覆面をして火力を防いだ」と書いている。(『ちぐさ鋼について』私教版、一九七五年)。

(40) 岩城卓二氏からの提起(「石見幕領におけるたたら製鉄と地域社会 播磨のたたら製鉄研究に向けて」『ひょうご歴史研究紀要』五、二〇二〇年)もある。食料米確保では、宍粟郡の場合、一八世紀初めは鉄山定米として年貢米から買い受けているが、後半になると鉄山師が直接市場で買い付けるようになっていく(前掲注3)。

(41) 『姫路市史』、第五巻上・近現代1(姫路市、二〇〇〇年)四一四頁。

(42) 山本俊一『日本コレラ史』(東京大学出版会、一九八二年)三〇頁。

堀内冷『兵庫医史散歩』(兵庫県医師会、一九九三年)五六〜五七頁。

(補注) 鉄山の移動に伴って墓地も移動するのだが、墓碑銘だけから住民の移動を追跡することは困難である。ところがそれを実証するように、家に伝わる位牌と系譜、言い伝えを手掛かりに先祖の鉄山墓地をたどった人がある。波賀町野尻出の梶本氏で、先祖は代々たたら鉄山の鍛冶大工として働き、清左衛門を襲名していたといい、引原川流域で、ゆかりのある滝谷・鍵掛・

赤西・音水の各鉄山墓地を巡って先祖の墓碑を見出し、昭和五十一年(一九七六)に野尻に寄せ墓している「梶本武邦「鉄山(たたら)」と日本刀 先祖のルーツを探る」(『ひょうご歴史研究室紀要』六、二〇二一年)。

【資料】死亡者数の推移

西方寺過去帳による。

西暦	和暦	年	男	女	父	母	当主	妻	子	幼児	外	合計
1760	宝暦	10	6	2	1	2	1		2	1	1	8
1761	宝暦	11	2	1		1	2					3
1762	宝暦	12	2	6		2	2	3			1	8
1763	宝暦	13	1	2	1	2						3
1764	明和	1	2	3	2	2				1		5
1765	明和	2	4	3	2	2	2	1				7
1766	明和	3		1		1						1
1800	寛政	12		1		1						1
1801	享和	1	1	1			1		1			2
1802	享和	2	4				3		1			4
1803	享和	3	2	2		1	1		1		1	4
1804	文化	1	2	2		2	2					4
1805	文化	2		5			2	3				5
1806	文化	3	2	4	1	2	1	2				6
1807	文化	4	3	2			3	1	1			5
1808	文化	5	1	2		1	1	1				3
1809	文化	6	2	7			2	4	3			9
1810	文化	7	4	2		1	4	1				6
1811	文化	8	4	2		1	4		1			6
1812	文化	9	2	1			1	1	1			3
1813	文化	10		1			1					1
1814	文化	11	8	1		1	2		3	3		9
1836	天保	7	1				1					1
1837	天保	8	2	1			2	1				3
1838	天保	9	1				1					1
1856	安政	3	1				1					1
1857	安政	4	2	2		1	2	1				4
1858	安政	5	3		1		2					3
1859	安政	6	2	4		1	1	2		2		6
1860	万延	1	2	1			2	1				3
1861	文久	1		1				1				1
1862	文久	2	7	6		1	4	3	1	4		13
1863	文久	3	1	1			1		1			2
1864	元治	1	3	1			2		1	1		4
1865	慶応	1	1	10		1		6	1	3		11
1866	慶応	2	5	2		1	4			2		7
1867	慶応	3	3	2			2	2		1		5
1868	明治	1	3	3		1	2	2	1			6
1869	明治	2	3	3			3	2	1			6
1870	明治	3	6	4	1	1	3	2	1	1	1	10
1871	明治	4	2	4			1	2	2	1		6
1872	明治	5	5	2			3	2	1	1		7
1873	明治	6	8				7			1		8
1874	明治	7	10	15			5	5	1	14		25
1875	明治	8	1				1					1
1876	明治	9	1	1			1			1		2
1877	明治	10	6	6	1	1	2	4		3	1	12
1878	明治	11										
1879	明治	12	2	1			1		2			3
1880	明治	13	2				2					2
1881	明治	14		1				1				1
1882	明治	15	1	1					1	1		2
1883	明治	16	1	2			1		1	1		3
1884	明治	17	4	2		2	4					6
1885	明治	18	2	1		1	2					3
			143	128	10	33	93	53	35	42	5	271